

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 29 日現在

機関番号：95401

研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H04561

研究課題名（和文）海外日本人社会における情報環境の変容とコミュニティの動態に関する比較社会学的研究

研究課題名（英文）A Comparative Sociological Study of the Transformation of Informational Environment and dynamics of Community in Overseas Japanese Societies

研究代表者

吉原 直樹（YOSHIHARA, Naoki）

特定非営利活動法人社会理論・動態研究所・研究部・研究員

研究者番号：40240345

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,900,000円

研究成果の概要（和文）：デンパサール市、シンガポール、ホーチミン市のフィールドワークによる知見の総合とそれ以外の東西にわたる複数都市に関する既存成果の援用によって、海外日本人社会が多種多様なメディアが複雑に交差する情報環境のなかで脱統合的で離散的な集団構造を形成し、日本人移民のセーフティネットの構築に照準したコミュニティを形成／再編しつつあることを明らかにした。そしてそのことによって、移民研究の新しいステージを画することに資することになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

海外日本人社会の「新しい形」と変動の位相を、人びとが「生活の共同」を切り結ぶコミュニティの次元から比較社会学的に追いつめることによって、グローバル化研究および移民研究に厚みを加えると同時に、海外日本人社会のグローバルな世界におけるポジション（立ち位置）の確認と今後の変容の方向の探究に資することになった。同時に従来の移民研究のバイアス（偏向）を質すと同時に、越境の変容からみえてくるエスニック・コミュニティの新たな理論地平をさし示した。

研究成果の概要（英文）：This study, based on the synthesis of findings from fieldwork of Denpasar, Singapore and Ho Chi Minh and incorporation of existing research in multiple cities across east and west other than the above, reveals that Japanese societies are forming a deintegrated and detached group structure in an information environment where a wide variety of media intersect in a complex manner, and so organizing/reorganizing a community aimed at building a safety network for Japanese immigrants. By achieving these results, it contributes to marking a new stage in immigration and community study, as well as globalization study.

研究分野：社会学

キーワード：比較社会学 海外日本人社会 情報環境 コミュニティ

1. 研究開始当初の背景

(1)グローバル化の進展の下で、海外日本人社会が「ライフスタイル移民」を担い手として、脱統合的で脱中心的な、外に開かれたコミュニティを形成しつつあることは、山下晋司等の文化人類学グループによって明らかにされていた。しかしそれはもっぱらバリのフィールドワークによって得られた知見にもとづくものであった。それらの知見は、グローバル化が異なった文化的背景をもつコミュニティに具体的にどのようなインパクトをおよぼしているかの検証が不十分なままに、つまり比較社会学的な視座の欠如のうえに得られた、まさに個別事例の知見にとどまるものであった。またグローバル化にともなう社会変動への視座が情報環境の変容を踏まえたものではなかった。

(2)そこで本研究では、上述の欠を補うために、フィールドを複数設定して、海外日本人コミュニティの変容を情報環境の変容に基軸を据え、比較社会学的に検証し、そこを通底する「ライフスタイル移民」のクロスカルチュラルな性格の抽出につとめることにした。

2. 研究の目的

(1)東南アジアの3都市(デンパサール、シンガポール、ホーチミン)に布置する日本人社会に座を据え、まず日本人社会が遭遇するさまざまなリスクにどのような情報環境の下で対応しているのかを、人びとの「生活の共同」の枠組みが形成されるコミュニティの位相で明らかにした。

(2)次に、(1)を踏まえて、海外日本人社会がグローバルな世界と個々のローカリティの文脈で自分たちの「立ち位置」をどう認識し、自画像を形成し再形成しているのかを検証した。

(3)最後に、(1)~(2)の解明・検証を経て、「ライフスタイル移民」の存在形態が複数社会において確認されること、そしてそのことがセーフティネットの構築の照準したエスニック・コミュニティの再編と不可分にむすびついていることを明らかにした。

3. 研究の方法

(1)海外(現地)3地点で質問紙調査、聴き取り調査、関連資料サーヴェイを現地調査協力者と共同して実施し、分析をおこなった。調査対象先はバリ、シンガポール、ヴェトナムの日本人会、日本商工会議所等。併せて、日本国内のジェトロアジア研究所等で関連文献の資料を収集し分析をおこなった。

(2)なお、(1)の現地調査は現地調査協力者の本務校の都合や病気等で参加できなくなったことにより、規模を縮小して実施し分析をおこなった。そこで、あらたに海外日本人研究会を組織し、当初の3地点のほかに複数都市の日本人会について調査している研究者からの報告を募り、比較社会学的分析の裾野を広げることにした。

(3)上記(1)~(2)の分析結果を踏まえ、2.「研究の目的」に沿って整序した。そしてそれをZoom会議で報告するとともに、報告集として刊行した。また、複数の学術雑誌にその成果の一部を発表した。

4. 研究成果

(1)海外日本人社会では、外国生まれ、クレオール、新二世等、さまざまな社会層が複雑に交錯し、エスニシティの多重化、コミュニティへの同化と異化が混然と進んでいる。それとともに、アイデンティティが分化し拡散し、従来の均質で一枚岩的なエスニック集団としての構造/構成に亀裂が生じている(もっともこうしたゆらぎには地域差があり、一概に同定できないことは銘記すべきである)。

(2)上記(1)で示した亀裂を深めているのは、自由に越境する、ある意味で日本国内あるいは従来のエスニック・コミュニティで色濃く存在していた家父長制にとらわれない「自由な女性」を担い手とする「ライフスタイル移民」である。かれら/かの女らの多くは、かつての海外日本人社会(以下、日本人社会と略称)がエスニック集団として共通に経験してきた戦争体験やリドレスから自由であるだけでなく、「個人的な動機」で移動し移住している。

また「企業移民」がポスト「国策移民」の地層に根ざしているようにみえながら、依然としてカイシャという家父長制にもとづく女性蔑視や人種差別の因習にとらわれている男性優位の観念のなかにあるのにたいして、上述の「ライフスタイル移民」は、そうした観念から解き放たれており、積極的に自分たちの「外」の多人種とも交流を深めている。その結果として、たとえば、ハイパーガミーのような現象が目立つようになっている。なお、それは自由なライフスタイルを

謳歌しているようにみえながら、「内なるオリエンタリズム」の逆像を示しているともいえる。

(3)日本人社会はいまや、ジェンダーだけでなく、階級、出身地などにおいて多次元的なディバイド(裂開)をかかえており、多様性、脱統合、変容によって特徴づけられるエスニック(異質な)社会になりつつある。それとともに、かつてのような凝集性を保持しえなくなっている。また同化に適応しながら、同化圧力から自分たちを守ってきたある種のシェルターの役割(セーフティネットワークの機能)も果たせなくなっている。このことを象徴的に示しているのが、日本人会の日本人社会における位置変容である。かつては、日本人会はどこであっても、当該日本社会の中心に位置していた。しかしいまや、それは多種多様な集団構成のなかの one of them でしかなくなっている。もちろん、それは世代、階層によってバリエーションをとともなうが、多くの人びとにとって、少なくとも意識のなかでは日本人会は徐々に「中心」から「周辺」に位置するようになっている。つまり一極集中型から多極分散型の日本人社会が前景に立ちあらわれているのである。

(4)こうした日本人社会の前景化を強く誘っているのが、人びとが日々の「生活の共同」のありおりの場面で、さまざまな 이슈の処理にかかわって切り結んでいる多種多様なネットワークである。これらのネットワークは、普段より生活世界が外に広がっていて、フットワークが軽い、モバイルな人びとの間で集中的かつ典型的にみられるアイデンティティの多重的な構築に共振して立ちあらわれているものであるが、より注目されるのは、それらがいまなお強く存在するホスト社会からの同化圧力に起因するストレスをやわらげるといったセーフティネットの役割を果たしていることである。しかもその場合、SNS やラインのようなネット社会のツールがきわめて重要なメディアとなっている。いずれにせよ、一極集中型の内に閉じられたコミュニティから、複数の集団が交差する重層的な関連構造をメルクマールとする、外に開かれた多極分散型のコミュニティへの移行が、情報環境の変容を帯同しながら大々的にすすんでいる。

(5)だが、得られた比較社会学的知見によると、以上のような移行/変容を単線的な図式に押し込めることはできない。たとえば、祭りを例にとると、それは、かつては日本人社会のビッグイベントとしてコミュニティを糾合する役割をになってきた。しかしそれはいまやホスト社会化(=現地化)のなかにあって、「内向的日系社会」ではなく「外向的日系社会」を示すものとなっている。またそうした点で、かつての日本をそこにみるということは不可能になりつつある。とはいえ、そうした祭りにたいする人びとのまなざしは必ずしも一様ではない。たしかに多くの人びとは、祭りを通して自らの「日本人性」を問い込み、見直すことから始まって、自明とされてきたエスニック・コミュニティの「境界性」を再審し脱構築するようになっている。しかしそれは必ずしも一方向的に進むものではない。地域によって、あるいは世代によって、そうした祭りを通しての「日本人性」の問い込み、見直しはバリエーションをとともなう。場所によっては、それは明らかに「日本人性」の再発見とか再認識などにつながり、結局のところ、エスニック・コミュニティを再構成し強化することになっている。

(6)さて、見てきたようなゆらぐ日本人社会を前にして、これまで自明のものとされてきたパラダイムやカテゴリーの有効性が根底から問われるようになっている。それは基本的には、グローバル化の進展にとともなう越境ならびにローカリティの変容とともに立ちあらわれたものであるが、それによってこれまで移民研究や海外日本人社会研究が前提としてきた「マイノリティとマジョリティ」とか「移動と定住」といった二分法、さらに「出移民」をキーワードとする単線的な「移民のナラティブ」(桑井 1995)や「国民の物語に回収されてきた移民概念」(貴堂 2002)の再審が不可避となっていることはたしかである。この再審を経て、日本人社会が「はざま」に生き、「フットワークが軽い」「ライフスタイル移民」によって深く特徴づけられるようになっていることの意味が明らかになるが、それを定型的にとらえるべきではない。「ライフスタイル移民」の存在形態じたいが、現象面での新奇さとは別に、日本人社会に生きる人びとが日本人としてのアイデンティティを保持しながら、その拡散や喪失の危機に直面して、自画像をどう再形成するのかという問題構制を深く内在させている。

(7) なお、(1)~(6)にまたがる論点の一部は、経験的レベルですでに検証されている。ちなみに、海外日本人社会研究会の成果は、吉原編著(2021)に集約されている(5 . 主な発表論文等、参照)。その構成を記せば、以下の通りである。

序章 越境の変容からみえてきた海外日本人社会
第 部 コロナ体制下の日本人社会
第 1 章 "日の丸"を背負って

- 第2章 戦前期の上海日本人の描かれ方
- 第 部 グローバルな移動と日本人社会
- 第3章 戦後シンガポール日本人社会と日本人グループ
- 第4章 デュッセルドルフ日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と課題
- 第5章 世界に広がる沖縄系ハワイ移民
- 第6章 アフリカに向かう日本人、日本に向かうアフリカ人
- 第7章 フィリピンの日本人・日系人社会
- 第 部 ゆらぐ日本人社会と多層化するコミュニティ
- 第8章 オーストラリアの日本人コミュニティの特徴と変貌
- 第9章 バリ日本人社会の変容
- 第10章 現代ホーチミン市日本人社会と日本人女性達
- 第11章 「異郷」生きる、根づく
- 終章 ライフスタイル移住と海外日本人社会のゆらぎ

また、バリに焦点化し、論点を深めたものとしては、吉原（2022）がある（ 5 . 主な発表論文等、参照）。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 橋本和孝	4. 巻 第139号
2. 論文標題 戦前東南アジアにおける日本人諸団体の存在形態-そのマクロ分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関東学院大学人文学会紀要	6. 最初と最後の頁 33-51頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本和孝	4. 巻 第140号
2. 論文標題 三浦襄ノート-高見順のバリ島訪問を中心に-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関東学院大学人文学会紀要	6. 最初と最後の頁 41-57頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本和孝・速水聖子・高橋一得	4. 巻 第141号
2. 論文標題 シンガポール日本人会傘下の同好会-活動と担い手-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関東学院大学人文学会紀要	6. 最初と最後の頁 51-66頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉原直樹	4. 巻 第5号
2. 論文標題 バリと日本人（覚書） 異国のなかの自画像のゆらぎ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 近畿大学日本文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 39-68頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計3件

1. 著者名 吉原直樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 286頁
3. 書名 コミュニティと都市の未来 新しい共生の作法	

1. 著者名 吉原直樹・橋本和孝・今野裕昭編著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 御茶の水書房	5. 総ページ数 307頁
3. 書名 グローバル化時代の海外日本人社会	

1. 著者名 吉原直樹	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 338頁
3. 書名 モビリティーズ・スタディーズ 体系的理解のために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	橋本 和孝 (HASHIMOTO Kazutaka) (90198672)	関東学院大学・社会学部・教授 (32704)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	速水 聖子 (HAYAMI Seiko) (90271098)	山口大学・人文学部・教授 (15501)	
研究分担者	松本 行真 (MATSUMOTO Michimasa) (60455110)	近畿大学・総合社会学部・教授 (34419)	
研究分担者	三浦 倫平 (MIURA Rinpei) (10756836)	横浜国立大学・大学院都市イノベーション研究院・准教授 (12701)	
研究分担者	今野 裕昭 (KONNO Hiroaki) (80133916)	専修大学・人間科学部・教授 (32634)	削除：2018年12月25日

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ブディアナ イマデ (BUDIANA IMADE)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 現地研究者（ウダヤナ国立大学文学部専任講師イマデ・ブディアナ）とのコラボレーションによる国際ワークショップの開催（2018年1月7日バリ州ウブド・カフェシシナン）	開催年 2018年～2018年
---------------------------------------------------------------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関

インドネシア	ウダヤナ国立大学			
--------	----------	--	--	--